

浄土教と菩提心

—— 送釈集と權邪論を中心として ——

稻垣良徹

元祖法然上人は浄土教の伝統に従つて念仏往生の教を弘められた。其の念仏とはどういう事か、元祖は送釈集を著して其の意義を徹底的に説明せられた。送釈集は竊竊に

南無阿弥陀仏

往生之業
念仏為先

と標榜せられてゐる。其の意は往生する為の業としては念仏が第一なりと云う意と解せられるから、従つて此の書は何故に念仏が往生する為の業として、第一であることを顕示したものと云う事も出来よう。此の書の題号が送釈本願念仏集にある事より推して、それは「念仏が殊更によつて送釈せられた本願の業なるが故」と解されるのである。

送釈集は一部十六章より成る。其の中、第一章は、「道諦禪師、聖道浄土の二門を立聖道を捨て、正しく浄土に帰するの文」と言うのであるから、仏教中に浄土往生を嚮う一宗が独立し得る事を確証せんとしたものである、又第二章は、「凶尊和尚、正體二行を立て、難行を捨て、正行に帰するの文」と云うのであるから、前章に於て浄土宗の確立した上に立つて、今は次に其の浄土宗では何を正行とするか、行には正行難行の別があり、正行にも正業と助業との別があるから、二別らに就いて判然と區別しなければならぬ事を明かにしたのである、さて以

上の如くにして、殊名念仏こそ正行であり、正行の中でも正業である事を明かにしたが、然らば殊名念仏が往生の爲の正定業たる事は果して狂説の上に確かな根據があるかどうか、仏教に於て行として教えられるものは甚だ多い。何故に独り殊名念仏のみが正定業となり得るか、此の妄に關して、淨土教正依の經と淨土教正依の師指導の著述とから明瞭にしたものが、第三章であつた。即ち第三章は、「弥陀如來、餘行を以て往生の本願とし給へず、唯だ念仏を以て往生の本願とし給へるの文」と云うのである、故に此の一章は選取果の中でも最も重要な章である、云うべきであらう、淨土教と菩提心と言う問題に關しても、又最も注意されるべきは此の第三章であると考えられるから、次に此の章の梗概を述べて置こう。

前二章は道辨、指導二師の文であつた、然しこゝでは直接無量壽王の、第十八願の願文が挙げられてゐる。そして其の願文には、乃至十念せん衆生が淨土に往生しないようならば我れ正覺を取らじとあるから、こゝ餘の行でなく、唯だ念仏のみが往生の本願の行である事の証據としたのである、次に其の願文を引用せられてゐる所の指導大師の觀念法門と往生私讀との文を引いて、其の念仏とは觀念ではなくして殊名の意味である事を明かにせられた、こゝが此の章の要旨と考えられる。以下元祖の右の引文に対する私釈の大意を紹介すれば、先づ諸仏には總願と別願とがあるが、四十八願は弥陀の別願であり、それは世自在王仏によつて説かれた二百一十億の諸仏刹土の中から選取し得られたものである、其の場合選取とは惡なるもの、變なるものを捨て、凶なるもの、好むもの、善なるもの、善なるもの、善なるものを取る、云う事、即ち取捨の意を有するものであるから、四十八願の一行に取捨の意が含まれてゐるが、中でも第十八願は念仏往生の願であつて、往生の行としては布施持戒乃至念菩提心等種々の行が挙げられるが、第十八願では、それら一切の餘

行を捨て、唯だ専修仏号の念仏一行のみを選び取つたものである。此の故に念仏は往生の爲に殊勝によつて選択せられた本願の行と云う事になるが、然らば何故に一切の諸行を捨て、唯だ念仏一行のみが往生の本願として選り取られたかと云へば、此の点に就いて玄祖は二つの理由を挙げられた、第一は所修念仏の名号は萬徳の歸する所であるから、二小を修める念仏は餘の行に比して勝れていゝと云う事である、第二は念仏は修し易く観念は成就し難いから、世尊は障り重い衆生の爲に特に修められたのであると云う、以上を以て大体の趣意は認り、その後では法藏菩薩の一々の誓願は皆成就しているから、第十八願の念仏往生の願も成就してあり、經に念仏往生の願成就の文がある事、十念は修められたことであり、所修念と聲とは是れ一つである事、又經に乃至と云い引導の釈に下至とあつても其の意味は一つであること等が説かれてゐる。何れも重要な意味を持つ問題ではあるが、こゝでは尊題に従つて、何れも念仏と云う行が淨土往生の正行正定業たる事は仏によつて選択せられた本願の行たる事が明かにされた矣を重視すべきであらう。

さて以上の如く見れば、念仏が凡ゆる諸行の中から勝劣と難易との二義の故に選り出され、それは他の行よりも勝れたものである故他の行はなくとも、此の念仏によつて往生し得ると云うのであるから、往生之業念仏爲定の説は確められたけれども、一般仏教の立場からすれば、これは容易ならぬ重大な宣言であつたと云ふのは、蓋し而施持戒等は固より、大乗仏教の根本とせられる般若も、亦正覺成道の爲の根基と云ふべき菩提心すらも、すべてこれらが念仏を送取せられた結果一掃して送捨せらるべき鐵行の中に収められてしまつたのであるが、衆菩提心すら送捨せられると云う事は何としても未曾有の大宣言である、前述した故に、中國に

於て淨土教の祖である曇鸞大師は、菩提心を発さずしては淨土往生は出来ぬと力説し、又元祖が歸依指導一師と云われた其の指導大師すら同窓菩提心往生好樂願と云われていたのであるから、この元祖の大宣言は曾かに聖道門の仏教からだけでなく、淨土教の中からも多大の反響を呼ばずにすむべき筈のものではなかつた。さうは明恵上人高辨が敢然立つて其の衷から鋭鋒を向けたのは不思議でなく、明恵上人が道心殊に深い人であつた事にもよるが、明恵上人が立たないにしても、早速は何人かによつて必ずや一度は問題にされるべき性質のものであつた、固より法然上人としては抽象的な菩提心と云う觀念に振われず、林名念仏する願生心こそ菩提心の實質内容をなすものであるから、仏の本願に隨つて林名念仏を往生の正定業とするに何の疑いがあるかと云う信念であつたに相違ない、然しやうした事は、他力念仏の義に徹した願生者でなければ容易に解得しうるものでなく、且つ鎌倉時代の教界には淨土教以外の諸宗も興隆した。さうは淨土教からすれば元祖の教が一度は受けぬはならぬ生みの訓練、又日本の仏教界からすれば聖道諸宗の存在を明かにする為にも何人か必ず一度は試みぬはならぬ淨土教への反応、やうした意味を持つものとして、選拔衆に対してなされた明恵上人高辨の摧邪論こそは最も大きな尸史的使命を果たしたものと云つて良いであらう。

思うに指導大師は凡夫の往生は定められたが、發菩提心を以つて淨土往生の條件と云つていない。元祖法然上人は曇鸞大師が力説された菩提心すら捨て、念仏こそあらゆる行の根本條件とされた。而して此の林名念仏する願生心が菩提心の實質内容をなす所の他力念仏であつたのである。彼の摧邪論は淨土往生を願う明恵上人の返述ではあるが、聖道門自力の立場を離れていない。だからたとえ仏の加被力を仰ぐとしても、自ら修行して聖者となり仏とならうとす

るのである、それ故菩提心が仏道の根元として要求せられてゐるのであり、それには自己の機根が現在に劣つていても兎も所將來は向上し得ると云う自信がなければならぬ、然るに選叔集の方では、自己の機を顧みると罪惡生死の阿夫で如何に努力しても向上し得る望みなどある者でないと言ふ現地に立つ法然上人の選述である。自己の力で仏道を修行し得る望みがないからこそ、淨土への往生を願うのであり、淨土へ往生すれば自然に仏力で改仏させられる、従つて淨土へ往生するのも、阿夫が聖者と成つて其の上で初めて往生すると云う事である筈はない。阿夫が自らは阿夫を離れる事が出来ぬと知ればこそ、仏が淨土へ往生させようとの本願を立てられたのであり、阿夫の發菩提心が可能ならば弥陀の本願は立てられなかつたであらう、茲に自力聖道門と他力淨土門との根本的相違がある、指導大師は仏願に隨順することこそ眞仏弟子であるとし、仏教の一切を理解するのに仏願を標準とせられた。それ故觀經でも定散兩門を説かれてゐるが、その本意は衆生に林名させる争であるとし解された、元祖は偏依指導一師と云われるが、偏依指導とはどの林名と指導によられたかと云うに、私は元祖が仏の本願に照して仏道の帰趣を判ぜられた筈に於て、全く偏依指導の意味があつたと思ふ、それ故第十八願によつて、念仏こそ往生の本願であるとし、遂に菩提心を以て餘行とせられるに至つた、これ全く本願中心主義の指導大師の思想を徹底せしめたものと云えるであらう、これに対して所惠上人は、元祖を評して「義に迷いて文を教す」と言つて居られるが、明惠上人こそ文面を教わられて、近尊大師の本意を見ず仏の本願を見失つたものではなからうか、明惠上人は華嚴宗妙門と自稱してゐる様に、自力聖道門の立場が抜け切れなかつた。それ故も指導に偏依すと云つて居られるが、仏の本願に徹底し切れぬとすれば、それが指導大師の眞意に沿ひぬ事は否定出来ぬであらう。

う、菩提心が正行で、外名は念心を成就させる為であるから、外名に付てなく、終には體念にまで進まねばならぬと云うなど、二心は正しく元祖と對立する意見であつた。

かく私は拙邪論が反對の爲の反對でなく、妄心より止むに止まらぬ心であつた事を疑うものではないが、台尊大師の如き罪惡深重の愚識とそれを超越せられた弥陀の本願に對する鐵仰との欠如が、元祖と明恵上人とを全く異なる立場に立たせるに至つた根本であると想う。

(研究堂買、四國生)